



訓練披露では隊員の緊張感のある声が飛び交い、その気迫に皆圧倒される。後藤市長はじめ来賓から賞賛と感謝の言葉が贈られた



人命救助の精鋭部隊、発隊 吹田市消防本部 高度救助隊

「吹田市の皆さんは、僕の家族」。災害や事故の複雑化で、大規模化の傾向を強める近年。ただただ大切な命を守る為に鍛錬を重ねた肉体と高度な技術を持つ、選び抜かれた精鋭たち取材した。

「点検・訓練」の24時間 命を救うあきらめない心

救助工作車に搭載されたすべての資機材は、使用頻度の高いものは毎日、そうではないものでも週に一度は必ず起動させ点検・訓練を行う。隊員の一日は、午前中の資機材点検と、様々なケースを想定した出動訓練に始まり、午後から夕方まではフィジカルを酷使する救助訓練、資機材使用の熟練度を上げるための訓練、さらに夜はウエイトトレーニングなどで、待機時間のほとんどを点検と訓練に費やす。「全国消防救助技術大会」において常に高い成績を残している競技「ロープブリッジ救出」も厳しい訓練のひとつだ。しかし、どんなに苦しい訓練を重ねても、この競技で身につけた技術が実際の救助現場で役立つことはなかなかないという。では何のための訓練なのか。「絶対にあきらめない心を持つためです」。そう話してくれたのは、隊員の清水千代志さん。過酷な訓練を黙々と繰り返すことでしか身につかない鋼鉄の意思。「でも競技としては吹田市代表としてやらせていただ

いていますから」。名もなきヒーローは照れくさそうに笑った。

隊章を着用し、 改めて士気を高める隊員たち

3月1日、「吹田市中消防庁舎」において「吹田市消防本部 高度救助隊の発隊式が行われ、後藤圭二吹田市長はじめ多くの人々が参列した。第一部では倒壊建物を想定した「救出訓練」、様々な事態での障害を想定し、5人1組が一致団結してそれを突破していく「障害突破訓練」が行われた。目にも止まらぬ隊員たちの俊敏な動き、命を守る為に磨き上げられた高度な技術。その姿、迫力に、参列者からは感嘆の声が上がる。その後は「救助工作車Ⅲ型」の披露に続き、高度救助資機材の解説と資機材の使用体験。10キロという重量感ある隊員の活動服を参列者も実際に羽織り、資機材に触れ、操作を体験。改めて隊員たちのハードな環境とたくましさ皆感服した。第二部は市長式辞、来賓祝辞、隊旗や隊章の授与などの発隊式典。「高度救助隊は活動の頻度は高くない。しかし、出動するのは甚大な被害



北摂の中でも新鋭の設備を備えた「救助工作車Ⅲ型」。11tもの積載量に加え、凝った車両のデザインは、車両マニアの間でも有名なのだとか

選び抜かれた精鋭たち、 救助工作車、そして5つの神器

世界に誇る日本の災害救助技術。しかし阪神淡路大震災の発生までは、瓦礫の下で助けを待つ人を救出するための資機材が、日本全国に十分に配備されていなかった。救助できなかった数多くの事例から、特別区や政令指定都市などには特別高度救助隊、中核市などには高度な資機材を備えた高度救助隊が配置されるようになった。

「吹田市消防本部 高度救助隊」もそのひとつ。愛称は「ARS (Advanced Rescue Suit)」。高度な、先進的な救助隊」という意味を持つ。阪神淡路大震災の時に救助隊によって救われた命は生存者の僅か2%。甚大な被害の現場へ駆けつけた後、どこかにいるはずの要救助者を見つけるのが容易ではなかったという。必要な装備がない。人数が足りない。救助

力が地震の力に遠く及ばない。そのジレンマを解消して一人でも多くの人命を救うために発隊されたのが高度救助隊である。高度な人命救出の教育を受けた隊員と、新鋭の救助工作車、そして5つの高精度資機材を持つ精鋭部隊だ。「高精度CDカメラ」で瓦礫の隙間に入り込み要救助者を発見すると共に、新鮮な空気を送りこむ「画像探索機」、要救助者の心音や呼吸音をとらえる「地中音響探知機」、高温や煙が立ちこめる環境でも要救助者を見つけ出す「熱画像直視装置」、僅かな光の中でも物体を認識できる「夜間用暗視装置」、初期微動を感知し大きな揺れが来る前に警報で告知する「地震警報機」。これらの高度救助資機材が高度救助隊を導入するにあたり必須となるアイテムだ。



1 救助工作車の後面。室内高も十分に取られ、車内活動空間がしっかりと確保されている
2 画像探索機。胃カメラのような機能に加え、ガスの濃度や温度の測定も可能だ
3 地震警報機。救出活動中の隊員の安全を確保し、二次災害を未然に防ぐ

の現場。自身の命をどうか大切にしながら、多くの命を守ってください」。後藤市長から激励の式辞が贈られ、隊員の表情は一段と引き締まる。今回授与された隊章は、愛称である「ARS」の文字と吹田市民の花「さつき」、市章にも使われている平和のシンボル「はと」を組み合わせた、実に吹田市らしいデザインだ。手がけたのは垂水町「CATグループ」の「大阪アニメーションカレッジ専門学校」の三木亜由美さん。その隊章を一言に装着した精鋭たちの姿はなんとも頼もしく、より一層凛々しく映った。



隊章を制作した三木さん。「自分の作ったデザインが形になって、嬉しいです」。だんだん実感が湧いてきた、とその表情からは笑みがこぼれる

お互いに命を預け合い、 家族を助けるつもりで現場に臨む

高度救助隊は災害現場で要救助者に一番近い場所、つまり一番危険な場所で行うため、お互いの信頼がないと非常に危険だ。彼らは交代勤務中の24時間、共に生活し、厳しい訓練を共に乗り越え、時にはくだらない冗談で笑い合う。すべての瞬間で互いの技量を確認し合い、危険な現場では命を預け合っている。救助活動を行うためだ。

「吹田市の皆さんは、僕の家族だと思っています」。隊員の坂東寛士さんはあ



救助工作車に興味をもった子に優しい眼差しで語りかける隊員。その様子に周囲の人々の顔もほころぶ

たたくも真剣な表情で語ってくれた。「僕は自分の家族がそこで助けを待っていると思って現場に向かいます。家族だと思っうから迅速に、大切に、心から助けたい。それが僕の救助に対する想いです」。災害時の救助には、自分で危険を回避する、自助と、近隣で助け合う、互助、そして救助隊が駆けつける、公助がある。この3つが効果的に機能し合って初めて尊い人命を救うことができる。お隣にどんな方が住んでいるのか、家族構成はどうなのか。災害の規模が大きく緊迫した状況では、そのわずかな情報がカギとなる。隊員と同じように、私たち市民も近隣で信頼関係を築き合い、日頃から一人ひとりが万が一を想定し、防災に対して常に高い意識を持つことが重要だ。



隊員の坂東寛士さん(写真左)、清水千代志さん(同右)。人命救助へのひたむきな想いを語ってくれた

取材協力

吹田市消防本部 高度救助隊
吹田市五月が丘南5-2
吹田市中消防庁舎
TEL.06-6330-0555